

ティーチング・ポートフォリオ

竹内 啓

(記入日：2019年 9月 23日)

- 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)
保育内容の理解と方法 (造形)、幼児造形指導法、図画工作Ⅱ(1)(2)、
日本文化実技Ⅴ(1)(2)、
- 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)
将来、保育者になる学生が自分の五感で感じた事から、自ら発想し考えて
表現や行動できるよう援助、指導する事で子どもたちにも、その大切さを伝
えられるようにする。
- 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)
実際に自分の目で観察し、発見したものを大切に自信を持って表現でき
るよう一人一人の状況に合わせて丁寧にアドバイスしていく。
- 4 成果 (どうだったか：結果と評価)
授業内で一人一人の状況に合わせて指導していくと時間がかかるが、苦手
意識が強かった学生が自分の表現に自信を持つようになってきた。
- 5 今後の目標 (これからどうするか)
一人一人の学生へのアドバイスの回数を増やすとともに、他の学生がどの
ようにやっているかの例を紹介しアイデアのヒントを与えたり、やる気を盛
り上げるようにする。
- 6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)
 - ・制作した作品を集めたスケッチブック
 - ・学生が記入した授業の振り返り

ティーチング・ポートフォリオ

近藤 千草

(記入日：2019年9月20日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

教職入門（1年 前期 幼稚園教職必修科目 2単位）、保育原理（1年 前期 保育士必修科目 2単位）、基礎ゼミナール（1年 前期 必修科目 2単位）、保育内容の理解と方法（児童文化）（1年 前期 保育士必修科目 2単位）、幼児教育体験学習（1年 通年 必修科目 2単位）、保育内容健康の指導法（2年 前期 幼稚園教職必修科目 2単位）、児童文化（3年 後期 選択科目 2単位）、幼児指導法総論（3年 後期 選択科目 2単位）、教育実習演習（事前・事後指導）（3年 後期幼稚園教職必修科目 1単位）、卒業研究演習（3年 通年 必修科目 4単位）、教育実習演習（事前・事後指導）（4年 前期 幼稚園教職必修科目 1単位）、保育・教職実践演習（幼稚園）（4年 後期 幼稚園教職、保育士必修科目 2単位）、卒業研究（4年 通年 必修科目 2単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

本学科の目指す「子どもと共に生きることができる自覚ある保育者」、「全てのくひと・もの・こと」に感謝できる保育者」という保育者像を念頭に置き、保育・幼児教育の基礎的事項の理解を図るなかで、保育者としての心構えや子どもに対する愛情、専門的な支援のあり方や技術の提示など、多角的な視点で幼児教育を捉え、実践に結びつけることができる保育者を養成する。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

保育・幼児教育の基礎的な科目については、幼稚園教育要領等の根拠法を基にした内容や方法の理解促進を図ることが目標となる。また、基礎的事項を抑えた上で、保育のイメージ化が図れるようアクティブ・ラーニングを導入し、子どもの心情に即した支援のあり方を検討するよう配慮した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

アクティブ・ラーニングにより保育を想定した学習を展開した結果、学生はリアクションペーパーやレポートにおいて、子どもの心情を示す具体的な言葉や、教育者として必要な配慮事項等の記述が見られ、理論と実践との往還的な学びの基礎が培われていることの確認ができた。

5 今後の目標（これからどうするか）

保育・幼児教育の意義や効果、展望について、その根拠となる見方・考え方

を複数の文献を用いて分析し、提示できるような学修の機会を増やす。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

①ワークシート

②リアクションペーパー

ティーチング・ポートフォリオ

江村綾野（幼児教育学科）

（記入日：2019年9月22日）

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

基礎ゼミナール（1年前期必修科目2単位）、幼児教育体験学習（1年集中必修科目2単位）、乳児保育Ⅰ（1年後期選択必修科目2単位）、幼児理解の理論と方法（2年前期選択必修科目2単位）、保育実習演習Ⅰ（事前事後指導）（2年後期選択必修科目2単位）、保育実習Ⅰ（2年後期選択必修科目2単位）、保育相談支援（3年後期選択必修科目2単位）、保育実習演習Ⅲ（事前事後指導）（3年集中選択必修科目2単位）、保育実習Ⅲ（3年集中選択必修科目2単位）、卒業研究演習（3年通年必修科目2単位）、保育教職実践演習（4年後期選択必修科目2単位）、保育内容演習（3）（3・4年前期選択必修科目2単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、以下の2点である。

①学生が幼児理解・保育に関する専門的知識と実践力を身に付けること

②学生が大学内外のヒト・モノ・コト（全ての環境）に自立的に関わり、一人の人間として、女性として、保育者として感謝する心と態度を身に付けること

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

①授業においては、学生の主体的能動的な授業参加を促すためにアクティブラーニングを取り入れている

②保育現場に則した教材（テキスト、視聴覚教材、保育教材、児童文化財など）を用意している

4 成果（どうだったか：結果と評価）

授業においては、講義→演習（ワークシートなど）→振り返りの循環が確認できた（エビデンス1）。本年度から開始した新カリキュラムに即した教材（エビデンス2）を使用している。

5 今後の目標（これからどうするか）

授業においては、個々の学生への学修課題を明示するための方策を検討したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1 リアクションノート（非公開）

2 テキスト 乳児保育、保育相談支援、保育内容演習（3）、保育実習演習

I（事前事後）、保育実習演習Ⅲ（事前事後）で使用

ティーチング・ポートフォリオ

幼児教育学科 菅井洋子

(記入日：2019年9月22日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

保育士資格と幼稚園教諭免許状取得をめざす保育者養成学科へ所属しているため、以下の「資格や免許取得にかかわる科目」及び「学科科目」を担当している。

〈資格・免許関連科目〉

- 「保育の心理学 (前期、1年次、必修科目、講義)」
- 「教育心理学 A・B (前期、2年次、2クラス、選択必修科目、演習)」
- 「保育内容言葉の指導法 A・B」(後期、2年次、2クラス、必修科目、演習)
- 「保育内容演習 (4)」(後期、3・4年次、選択科目、演習)
- 「生活」(後期、3・4年次、選択科目、講義)
- 「保育実習演習 I (事前事後指導) B」(後期、2年次、必修科目、演習)
- 「保育実習 I」(後期、2年次、必修科目、実習)
- 「保育実習演習 III (事前事後指導) A」(通年、3年次、必修科目、演習)
- 「保育実習 III」(通年、3年次、必修科目、実習)

〈学科科目〉

- 「幼児教育体験学習 (通年、1年次、必修科目、演習)」
- 「卒業研究 (通年、4年次、必修科目、演習)」

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学科の特性をふまえ、専門的 (学問的) 知識に触れながら、保育・幼児教育における具体的な事例等をもとに人の発達や子ども理解を深め、とくに「子どもの視点」から保育者の役割や援助、環境構成等を考え、意味を深く理解し主体的に行動できるようになることを理念・教育目標として教育活動を行っている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学科内の「4年間の学びの流れ」や「実習時期」、「各学年で学ぶ内容」をもとに、担当授業科目を位置づけ、授業間のつながりを考慮し関連づけながら学生の学びが深まるように工夫している (例：1年次「保育の心理学」〈乳幼児の発達〉と2年次「教育心理学」〈子どもの実体験と発達に応じた援助等〉、1年次前期「保育の心理学」〈身体・運動・知覚・言語の発達等〉と「幼児教育体験学習」〈科学博物館見学

での子ども体験からの学び、附属保育園での保育体験等)。

また、保育者になるための力を養うためには、多様な「人」と関わり協働しあうこと、そして様々な「道具や方法」を用いて活動すること等が必要である。そこで、授業内で複数の学生達が関わり協力しあうアクティブラーニングの機会を設け、パソコンやカメラ、携帯、子ども体験キッド（視野メガネ）等の道具を実際に活用し、気づいたことや考えたことを伝え合い、表現する方法としてデジタル媒体や紙媒体を用いて発表する等、授業内容とともにこれらを意図的に導入する工夫をしている。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

学生自身が授業間のつながりに気づくと理解が深まり、実際に体験し活動するなかで気づきが増えていくと興味関心がより深まり、主体的に考え行動することや意味を深く知ることが楽しくなる等が、学生の振り返り記述（コミュニケーションシート等）に記されていた。

エクセルやパワーポイントで資料を作成する経験については学生により差があり、またスマートフォンでレポートを書く学生もいる等、学生の現状をふまえ多様な道具や方法に触れることができるように検討していく必要があることが判明した。

5 今後の目標（これからどうするか）

現 1 年次学生から新カリキュラム対応の授業科目・内容である。旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行期において、新たに授業を位置づけ、連続性を考えながら、保育者にもとめられている力を養えるよう授業内容や方法を検討していきたいと考えている。

また、グループでの授業時間外学修活動が、他の教員と重なってしまうことがあったことをふまえ、授業外学修時間の内容や形態も教員間で調整し連携していきたいと考えている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 授業毎に学生が記述する「コミュニケーションシート」（未公開）
2. 学生による授業評価アンケート（未公開）
3. 教員相互の授業参観及び評価アンケート（未公開）：前期「教育心理学」実施
4. テキスト

菅井洋子「テーマⅡ子どもの発達を考える視点 5.言語の発達」(pp.44-56)

「子どもの育ちを支える発達心理学」朝倉書店、2013
菅井洋子「第 2 部 子どもの言葉を育む保育、第 5 章 保育環境と言葉」
(pp89-104)「保育内容 言葉」光生館、2018

等

(記入日：2019年9月23日)

1. 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

児童家庭福祉（1年後期必修科目2単位）、子どもの福祉と行財政（2年後期選択必修科目2単位）

2. 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、学生が子どもを取り巻く制度や政策を理解し、さらに子どもを巡る現代の問題について理解し、事例を通して保育士としてその問題について必要な知識や方法を考え保育士としての役割や保育所の役割機能そして、保育所を巡る専門機関や専門職との連携について考え学ぶ機会を提供することである。

3. 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

学生がイメージを持って具体的に学まなべるように、解説及びメディアによる事例の紹介を行い、その事例についての自分の考えを書き、それをグループワークにより、自分の考えを整理し他者の考えも取り入れ、相互に共有しそれを発表している。また、児童家庭委員を招き、子どもの虐待防止のための子育て講座（虐待防止及び子どもへの注意のタイミングや伝え方等）を学生が受けることにより、子どもへの対応や実務家の事例についてロールプレイを通して学ぶことも取り入れている。その後、振り返りを行い、保育士としての子どもへの対応についてリアクションペーパーを用いて、学びを確認している。

また、里親制度については、概要を説明しメディアを通して事例のイメージを掴んでもらうとともに、東京都里親推進委員から里親と里子の事例や保育所での里親制度に関する配慮事項等を聞き、里親制度の推進の意図と課題についての現状を伝えている。

4. 成果（どうだったか：結果と評価）

児童家庭福祉においては、事例を通して、学生相互が自分の意見を他者に伝え、他者の意見も知ることで、自主的に学び、自分の表現力を磨き、他者の意見を理解しようとしていることが確認できた。（エビデンス1）。レジュメを作

成し、重要な部分を明確にし、事例を説明しながら学生の理解を深められるようにした。(エビデンス2) 実務家を読んで事例を聞き、概説と事例が結びつくように再度メディアを用いて理解度の確認をするためにリアクションペーパーを使用した。(エビデンス3)。

5. 今後の目標 (これからどうするか)

学生がホームページ等を用いて、自分の住んでいる自治体や保育所が取り組んでいる内容を調べ、学びと自分の住んでいる自治体の取り組みを理解し、より課題がより具体的になるように促す。また、学生同士が授業時間外に子どもを取り巻く課題や保育所の役割・機能を相談、議論し、資料収集、データ収集(ラーニング・コモンズ)し、事前事後学修をより具体的に促す。

6. エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

1. リアクションペーパー (非公開)
2. テキスト 松本園子・堀口美智子・森和子 (2017)『子どもと家庭の福祉を学ぶ (改訂版)』ななみ書房
3. レジюме

ティーチング・ポートフォリオ

古屋朝映子

(記入日：2019年9月24日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「保育内容の理解と方法(運動)」(1年通年選択必修科目2単位),「体育Ⅱ(1)」(2年前期選択必修科目2単位),「体育Ⅱ(2)」(2年後期選択必修科目2単位),「幼児体育指導法」(2年前期選択必修科目2単位)など.

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、保育者を目指す学生が、乳幼児の生活と遊びを豊かに展開するために必要な運動に関する教材等の知識や、環境構成および具体的展開のための技術について、実践の中における主体的活動を通じて身につけることである.

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学生の主体的な学びを促し、実際に身体を動かした実践の中での学びと理論とを結びつけられるようにするために、「保育内容の理解と方法(運動)」において、毎回の授業後に、実践した実技の内容を記述するとともに、授業の内容から学んだことや質問等を記入する自作の「学習ノート」を使用し、授業を展開した.

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

「学習ノート」の活用により、学生が授業で実践した内容について振り返り、学びを深めていることが確認できた(エビデンス1).特に、毎回質問事項を記入させることにより、自らの学びを再確認し、より深い学びへと繋がっていることが考えられる.

5 今後の目標 (これからどうするか)

「学習ノート」の記述内容について、毎回教員がチェックし、コメントを記載して返却しているが、今後は、個々の学生の学びを全体で共有する機会を増やす必要があると考えられる.

6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

・「学習ノート」(非公開)

ティーチングポートフォリオ

幼児教育学科 古山 律子

(記入日：2019年9月24日)

1. 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「保育内容の理解と方法 (音楽)」(1年次通年選択必修科目 2単位), 「ピアノ演習」統括 (2年次通年学科の独自科目 2単位), 「弾き歌い演習 (3年次通年学科の独自科目 2単位), 「音楽Ⅱ (1)」(2,3年次前期選択必修科目 2単位), 「音楽Ⅱ (2)」(2~4年次後期選択必修科目 2単位), 「幼児音楽指導法 (1)」(2,3年次後期選択必修科目 2単位), 「卒業研究演習」(3年次通年必修科目 単位), 「卒業研究」(4年次通年必修 単位), 「幼児教育体験学習」(1年次通年必修科目 2単位) など

2. 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目的は、「音楽的感性と豊かな表現力を兼ね備えた幼稚園教諭・保育士となる人材を育成する」こととしている。本学科の卒業生の大半は、幼児教育・保育職に就く。学科が目指す「子どもと共に生きることができる自覚ある保育者」「すべての<人・もの・こと>に感謝できる保育者」を育成することを目指すものである。

3. 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「保育内容の理解と方法 (音楽)」では、子どもの音楽表現に関する理解を深めるために新たなテキストを採用し、動画を用いて解説などを加えるようにしている。ピアノや歌唱の実技習得に関しては、ペア学習を用いて学生相互の学び合いが深まるよう工夫している。「音楽Ⅱ (1)」では、実技中心の内容からテキストや配布資料の該当箇所を事前学修として学生が読み、レポートを提出、事前学修をもとに議論を行う時間を増やし、学修の質を高めている。「幼児音楽指導法」では、対象年齢ごとに実技及び理論的背景を合わせて提示、事前事後学修にも盛り込み、学生の意欲や理解力・実践力向上に役立てた。

4. 成果 (どうだったか：結果と評価)

「保育内容の理解と方法 (音楽)」では、実技に加えてテキストと連動する音声・動画ファイルの視聴により、学生が子どもの音楽行動に対する関心を深めて意見や質問が活発に交わされている (エビデンス1)。「音楽Ⅱ (1)」では、事前学修の資料をテーマに沿って選択できる新たな提示の仕方に変更したことにより、議論が活発となり学生相互のグループダイナミズムが生まれた (エビデン

ス2)。「幼児音楽指導法」では、実技と理論的背景の連環が学生のポートフォリオの記述にも多くみられるようになり、意欲・理解力・実践力が向上した(エビデンス3)。

5. 今後の目標(これからどうするか)

保育内容の領域「表現」の専門的事項である音楽表現に関するテキスト(『コンパス保育内容:音楽表現』建帛社2020年2月発行予定)を共著で執筆しており、さらに新要領・指針に対応する学修内容を確認し、次年度の授業に活用しながら質を上げていくことを構想している。

6. エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- 1 テキスト「乳幼児の音楽表現」学生による付録〔音声・動画ファイル〕
のダウンロードも可能 中央法規
- 2 学生の授業内ポートフォリオ(非公開)
- 3 学生の授業内ポートフォリオ(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

国谷 直己

(記入日：2019年9月24日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

基礎ゼミナール (1年前期必修科目 2単位)、幼児教育演習 (3年通年必修科目 4単位)、保育実習演習Ⅰ (事前・事後指導) (2年後期選択必修科目 1単位)、保育実習演習Ⅲ (事前・事後指導) (3年通年選択必修科目 2単位)、幼児教育体験学習 (1年通年必修科目 2単位)、教育史 (2～4年後期選択必修科目 2単位)、教育原理 (1年後期選択必修科目 2単位)、リメディアル、実習訪問など。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が教育学・保育学における知識や実践を多角的に考察し、それらを自律的に獲得する姿勢を身に付けることである。そのうえで、さまざまな教育・保育問題へ主体的に行動する実践力を育成することである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

基礎ゼミナールでは、大学生としての4年間の学生生活をイメージできるように一日のスケジュール、一週間のスケジュールをそれぞれ詳細に記入できるワークシートを作成させ、授業外における学修の重要性を促した。さらに、大学における学習の基礎として欠かすことのできない「読む力」「まとめる力」「発信する力」を養うために、現代の教育・保育問題に関する記事を要約、発表、全体討議を行った。幼児教育演習においても、4年次に執筆する卒業論文を見据えて、学生の文章力を向上させるために「要約する力」「発信する力」の育成に取り組んだ。教育原理および教育史では、知識と実践が融合することを目的に、学生自身の被教育者体験と教育の理念や思想が結合するような授業を展開している。また、学生の主体的・対話的かつ深い学びを促進するために、一方的な知識注入型の授業を避け、グループ・ディスカッションなどのアクティビティを取り入れた獲得型授業を展開している。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

基礎ゼミナールにおいては、学生がレポートとは何か、またその書き方を理解できた (エビデンス1)。幼児教育演習では、まだ基礎的な課題を達成したに

過ぎないので、卒業論文執筆に向けたレベルアップを図る必要がある（エビデンス2）。

5 今後の目標（これからどうするか）

幼児教育演習では、卒業論文の執筆に向けて3年次秋学期から段階的に進めていく。テーマ設定、先行研究の検索、資料収集、データ収集分析などを指導し、主体的に取り組んでいるか成果報告の場を頻繁に設けることで、学生の学修に対する意識を継続させる。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 ワークシート、レポート（非公開）
- 2 レポート（非公開）
- 3 テキスト